Southern California Sun

Genius

STEVE LUKATHER

南カリフォルニアの太陽をたっぷりとあびて、何不自由なくグローイング・アップしたような
L.Aスタンダードが、1本のギターを手にした瞬間、全く別のやりきれない男に変身する。
スティーブ・ルカサー、1957年生まれ。
80年代のギターサウンドは、イバニーズとこの天才の10本の指がリードする。

STEVE LUKATHER

「ヘイ、スーパースター！」と声をかけると「誰のことだ。」と応える。ジャパン・ツアーの武道館前、トト会いたさにつめかけた群衆を見て「何してるの、この人たちは？」「きみたちのオーディエンスさ。」と答えると、口笛一ふき、「すげえ！」「おい、ジェフ見ろや。あれ、俺たち見にきてるんだぜ。」もう大きわぎである。
かように彼らは天真爛漫、天衣無縫。音楽が人間の形して歩いているようなもの。
知ってか知らずか、目下、L.Aのミュージックシーンは彼なくしてははじまらない。西海岸で最も多忙を極める男である。ベラボーなお人好し、表も裏もあのカリフォルニアの太陽から、まる見えにしている。ギタリストとして、少しはましな方、ぐらいにしか自分を見ていないんじゃないかと思えるふしもある。驚愕のハイパー感性、空跳ぶミュージカルスピリット。こだわりがない。好きなことならなんでもやっちゃう。ギャラがあろうがなかろうが、その気になれば例のプレイをご披露してしまう。それがミュージック・ビジネス界に一風吹かそうが、吹かすまいが、知ったことではない。
そんなスティーブに我々のNew GuitarをためしてもらおうとTelすると、「やたらいそがしいのに……」と言いながら、奥さん同伴で、待ち合わせのレストランへやってきた。あまり紹介されていないが、ランナウェイズというグループを御存知だろうか。金髪のリードヴォーカルが、黒のアンダーウェアでがんばっていた。彼女のお姉さんだか妹さんだか聞き忘れたが、が、ヒズ・ワイフである。
スティーブはギターを見るなり、そこで始めちゃう。「スティーブ、きみは早弾きで有名なんだけど……」と言いかけると、「このくらいかい」あいた口がふさがらないプレイ。そして「ごきげん！」と、どなる。以来イバニーズは彼の商売道具になった。これがこうなっているでしょ、だからここをこうして、こうなるとね。というタイプじゃないから、良いか、悪いかしか判断しない。厳正明解なギター評論。こういう人は恐ろしい。遠慮や計算なんてこれっぽちもない人だから「ごきげん！」ならごきげんなギターなんだろうと思うしかない。スティーブ・ルカサーのギター、ARシリーズの中からは305と112。手は全く加えていない。ギターショップにディスプレイされているものが、彼の手にあるものである。彼が去年から今年にかけ、手に入れたお気に入りが、これらギターとグラミー・アワーズではないだろうか。新しいオーダーがスティーブからとどいている。近い将来お目にかけられるはずである。ご期待を。

AR305AV

AR300CS

AR100CS

AR300GL

AR300AV

AR100
ベーシックAR、ハードウエアは、あくまでも上級機種と同じ。しかもAR100オリジナル・トーンコントロール兼用"デュオ・サウンド"システムがマウントされ、豊富なサウンドヴァリエーションが自慢。ローズウッド・フィンガーボードとチェリーサンバーストフィニシュがスタンダードな風格を感じさせる。

AR305
バールアイ・マホガニーが、独得で粘りのある共振性をもたらす。これがスティーブの感性にジャストフィット。ウッドのクォリティがARのラインナップに新しいキャラクターを加えた。

AR300
セットネックギターの真髄ともいえるヴァイブレーション・トランスミッションをプレイヤーが体験できる。エレクトロニクスは、トライサウンドを採用。可能な限りのヴァリエーションをプレゼンテーションします。メイプルトップとマホガニーバックを基本に、エボニー指板のしっとりとしたフィンガリングをスーパー58ピックアップがうけとめる。レアウッドの息づかいには、ピックアップも又、ヴァイタルなキャラクターが必要。スペシャルなアルニコマグネットとのコンビネーションが、あくまでタイト、そして脅威のロングサスティンを。